

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

蕭紅と『生死の場』

著者	山本 和子
雑誌名	研究論集
巻	85
ページ	67-83
発行年	2007-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1443/00006232/

蕭紅と『生死の場』

山本和子

要旨

蕭紅（本名：張乃瑩）は1930年代、東北出身の「抗日作家」として、中国文芸界にその名を馳せた。蕭紅の生きた1911年から1942年は、日本が中国への侵略を拡大していった時代であり、中国国内では、封建体制が崩壊を始め民主主義が芽生えると同時に、「抗日」のもとに民族意識に目覚めていった激動期である。

蕭紅の前期の代表作とされる『生死の場』は、満州事変前後の中国東北の農村を舞台に書かれたもので、前半では、農民たちが封建地主の苛酷な搾取のもと、猛威をふるう自然や伝染病、貧困と必死に抗うさまが、後半では、日本軍に侵略されて生きる術を失った農民たちが、「抗日」に立ち上がるさまが描かれている。

蕭紅の生い立ちから『生死の場』出版までの経過を辿り、『生死の場』における女性像に作家自身の体験がどのように投影されているか、女性問題の観点から考察する。

キーワード：蕭紅、『生死の場』、抗日作家、中国女流作家、農民小説

はじめに

蕭紅（本名：張乃瑩）は、1930年代、東北出身の「抗日作家」として中国文芸界にその名を馳せた。

彼女は1911年、辛亥革命が勃発したその年に、中国の東北、黒竜江省ハルビン郊外の地主の家に生まれた。そして、1942年1月22日、日本軍占領下の香港で、31年に満たない短い生涯を閉じる。¹⁾

蕭紅の生きた1911年から1942年は、日本が中国への侵略を始め、満州国を建国し、さらに日中戦争へと戦域を拡大していった時代であり、中国国内においては、封建体制が崩壊を始め、民主主義が芽生えると同時に、「抗日」のもとに民族意識に目覚めていった、まさに激動の時代であった。

蕭紅はそんな半封建半植民地の東北、ハルピンで創作活動を始めるが、日本傀儡政権の厳しい弾圧に遭い、青島へ、そして上海へと逃れる。上海で小説『生死の場』を出版し、作家とし

での地位を確立する。やがて上海が日本軍の占領するところとなり、武漢、重慶、そして香港と、戦火を避けて移り住む。しかし、安全を求めて逃れてきた香港も、1941年12月8日、太平洋戦争に突入すると、直ちに、日本軍に占領される。彼女は、日本の帝国主義的侵略から逃れて転々とせざるを得ない情況下、不安と恐怖のなかで、その作品を書き綴ったのである。

1933年、ハルピンで抗日文芸活動に参加して作品を書き始めてから、わずか十年足らずの間に、字数にして百万字近くに及ぶ作品——小説、詩、散文——を書き残した。

蕭紅は、社会の底辺で生きる虐げられた人間の不条理を描く。善良で単純な彼らは生きるために必死にあがくが、その努力が報われることはほとんど無い。猛威をふるう自然や、理不尽な支配階級の前では為す術もなく、虫けらのような存在なのである。虐げられて絶望的境遇に追い込まれた人間は、やがて諦め、絶望し、そして精神が麻痺し、人間性さえも失っていく。

蕭紅は自己の周りの世界を繊細な感性でつぶさに観察し、それを簡明かつ躍動感溢れる文体で表現した。その作品の底流をなすのは深い人間愛と強い正義感である。

1. 生い立ち

蕭紅が生まれた黒竜江省胡蘭県は南に松花江が流れ、江を隔ててハルピン市と対峙する。もともと、満州族、蒙古族、タタール族など少数民族の居住地で、18世紀になって漢民族が増え始めた辺境の地である。

蕭紅の祖先も清朝乾隆年間に山東省から逃れてきた難民だという。遼寧省の満州族地主の雇農から身を起し、一時は隆盛をきわめるが、4代目にあたる祖父張維禎（1849-1929）の代になって家業が傾き始め、土地や家屋を貸して暮らしを立てていたようである。

祖父と祖母には三女一男が生まれたが、娘三人は嫁ぎ、息子は夭折する。それで甥を養子に迎えて跡継ぎとした。蕭紅の父張廷挙（1888-1960）である。²⁾

蕭紅が生まれたとき、家はすでに落ちぶれてはいたが、胡蘭県では裕福な家であり、立派な屋敷を構えていた。青れんが造りの建物、母屋は五室から成り、西側の二部屋が祖父母の居室、東側の二部屋が両親の居室、真ん中に堂屋があって通路兼台所、堂屋の北側に扉があって裏庭に通じていた。裏庭は広く、東、西、北の三方は土塀で囲まれていた。

蕭紅は父と母の第一子として誕生する。

蕭紅が生まれて、「第一には、祖父に限りない喜びをもたらし」、彼女が大きくなると、祖父は彼女をととも可愛がった。彼女は「世界に祖父が居れば十分で、何も恐くなかった」³⁾し、また祖父から「人生には氷のような冷たさと憎悪のほかに、温かさと愛があることも知らされた」⁴⁾のである。

祖父は一日じゅう、ぶらぶらしていた。祖母はどんな仕事も彼に与えなかった。祖母のタンスの上に錫の細工物があって、それを磨くことだけが祖父の仕事であった。これは、祖母が祖父に割り当てた仕事なのか、それとも彼がすすんでやりたがったのか、わからないが、祖父が磨いているときは、いつも、わたしは不機嫌であった。ひとつには、わたしは裏庭に遊びに連れて行ってもらえないし、ひとつには、祖父がこのためにしばしば罵られたのである。祖母は彼が怠け者だといっては罵り、磨き方が悪いといっては罵った。祖母が祖父を罵りはじめると、しばしば、どういうわけか、わたしも罵られたのである。祖母が祖父を罵りはじめると、わたしはすぐ祖父の手を引いて外へ向かった。「裏庭へ行こうよ」といいながら。それで、祖母はわたしを罵ったのかもしれない。彼女は祖父を「トウヘンボク」といって罵り、わたしを「チビトウヘンボク」といって罵った。

蕭紅は祖父を引っ張って裏庭へ行く。裏庭は広々としていて、家のなかの狭苦しくて窒息しそうな世界とはちがって、草木は生い茂り、目の前には鮮やかな緑の世界が広がっていた。

裏庭に着くやいなや、あたかもなにかに向かって走り出すかのように、なにかがそこでわたしを待っているかのように、わたしはやみくもに駆け出す。だが、わたしにはなんの目的もなかったのである。ただこの庭のなかではなにもかもが生きていると感じ、わたしの脚だって跳びはねずにはいられなくなったみたいなのだ。

跳びはねて全身のエネルギーを使い切ってしまう限り、祖父が、わたしが疲れるのを心配してわたしを呼び止めようとしても、それは無理なことで、呼び止めようとすればするほど、逆にわたしはますます言うことを聞かなかった。

自分自身ほんとうに走れなくなって、やっと座り込んで休憩する。その休憩もほんの束の間で、つるから胡瓜を一本もぎ取って食べるだけで、それでもうよかったのである。休憩し終わるとまた駆けるのだった。⁵⁾

蕭紅研究家鉄峰は「こうした自由気ままでなんの束縛もなく屈託のない生活環境が、蕭紅をして、心底自由を愛し、自由奔放で飾り気のないおおらかな気質を形成せしめた」⁶⁾と言う。蕭紅が6歳のとき、祖母が亡くなる。そして、蕭紅は祖父について「詩」を学ぶ。

祖父がわたしに教えたものに「千家詩」があるが、テキストはなく、すべて口授である。祖父が一行唱え、わたしがそれを唱える。

(中略)

わたしには字も意味もまったくわからないのだが、唱えてみるとその音がとても心地よ

いと感じた。だから、嬉しくなって大声で唱える。わたしの声は祖父の声より大きかった。

わたしが唱えはじめると、家じゅうに響き渡り、祖父は私が喉を痛めてはいけないと、しょっちゅうわたしに警告した。

「屋根がおまえの声で吹っ飛んでしまふよ」⁷⁾

こうして、蕭紅は、「耳に快く響く音」として言語を身につける。後年、その磨かれた言語感覚から、彼女の躍動感溢れる文体が生み出されるのである。

このように、祖父は彼女を慈しみ、教育し、その成長を喜んだ。

伯父もまた、聡明な蕭紅を可愛がり、高級小学（小学5年、6年）に進んだ彼女に古文を教える。そのとき、従兄弟たちも一緒に学んだのだが、伯父はいつも従兄弟たちに「おまえたちは男の子だけど、櫻花（蕭紅）はおまえたちよりなにもかもよくできる、本当に賢い」⁸⁾と言った。また、誰に向かっても、蕭紅のことを褒めて「記憶力がよくて、機転が利く」と言った。

蕭紅は小学校を卒業して中学校への進学を希望するが、父はそれを許さなかった。

蕭紅の父は中国封建社会における伝統的教育を受けた知識人であり、辛亥革命、五四新文化運動を経て、進歩的思想をも持ち合わせていたようである。しかし、家には封建的家父長として君臨した。そして、娘を相応の相手と結婚させるべく、さっさと蕭紅の婚姻を決めてしまう。⁹⁾したがって、娘が中学に進学することに何の意味も見出さなかったばかりでなく、逆に弊害が生ずるのを恐れた。

このとき、蕭紅は伯父が父を説得してくれるのではないかと期待した。彼女の才能を高く評価していたあの伯父なら、自分が進学することに賛成してくれるにちがいない、と。しかし、伯父は「進学する必要はない、家で先生に来てもらって学べば十分だ。ハルピンの学生はふしだらだ」¹⁰⁾と、はねつけたのである。

どうしても中学進学をあきらめきれない蕭紅は「中学に行けないなら尼寺に行く」と半ば父を脅迫するようなかたちで説得し、1927年秋、ハルピンの女子中学に入学、寄宿舎生活を始める。女子中学では、絵画に熱中して写生会に出掛けたり、外国の翻訳文学や、謝冰心、徐志摩、魯迅、茅盾などの「新文学」に親しんだりして、新しい時代の芸術や思想に触れ、自我を確立するとともに自己実現の道を模索し始める。

1928年6月、東北軍閥の張作霖が日本関東軍の陰謀による列車爆破で死亡。11月にはハルピンで学生による反日愛国デモが組織され、蕭紅も参加する。

救国の熱い思いにかられて学生愛国運動に参加するなかで、ハルピン法政大学の学生陸振舜と知り合い、恋愛。そして、父親の決めた婚姻を嫌って家を出、北京で陸振舜と従兄妹を装って同棲しながら、北京女子師範大学付属中学高中（高校）に通う。しかし、それも長くは続かなかった。陸振舜の家が仕送りを止めたため、経済的に行き詰まり、破局を迎える。

1931年1月、蕭紅は胡蘭県に戻るが、学生運動に加わるわ、親の決めた婚姻から逃げるわ、で「家」の面目をひどく傷つけたと、家族の非難を浴びる。父親は娘の奔放な行動に業を煮やし、厳しく監視しなければいけないと考えて、阿城県にある本家一族に、彼女を託す。

その年の秋、阿城県は不穏な空気に包まれた。地主である伯父たちが地租を値上げしようとしたのに対して、農民が抵抗の動きを見せたのである。

蕭紅は持ち前の正義感から、疲弊しきった農民からこれ以上搾取するのは非情だと抗議し、挙げ句の果てに、激怒した伯父たちに監禁されてしまう。かろうじて叔母たちに助け出されて、這々の体でハルピンに逃れるのだが、この阿城県でのわずか7ヶ月の経験が下地となっていて、のちに、封建地主の搾取に苦しむ農民をテーマにした作品が生まれることになる。

この間、父親との葛藤はますます激しくなり、強情で負けず嫌いの蕭紅は、家父長として絶対的父権で自分を押さえ付けようとする父親に猛烈に反撥し、以後、どんなに困窮しても、決して父親に援助を請うことはなかった。

蕭紅は、父親のことを、あたかも封建搾取階級と反動勢力の代表であるかのように、冷酷非情な人間として描く。

父はしばしば食欲のために人間性を失った。使用人に対して、自分の子供に対して、さらには私の祖父に対してまでも、ケチでよそよそしく、ひいては冷酷であった。一度、借家人と家賃のもめごとがあって、父は借家人の馬車を馬もろとも取り上げた。借家人の家族が祖父の前に跪いて泣きながら訴えた。そこで、祖父は茶褐色の馬二頭を、車から解き放して返してやった。馬二頭のこと、父は祖父に、夜通し文句を言ったのである。「馬二頭はわしらにとってはたいしたことではない、だが、貧乏人にとってはこの二頭の馬は命の綱なのだよ」祖父はこのように言ったのだけれど、それでも父は文句を言い続けた。¹¹⁾

子供のころ蕭紅は、厳粛かつ明瞭な口調で筋の通った話をする伯父をとても尊敬していたし、伯父の言うことは絶対正しいと信じていた。その伯父が、女は中学に進学する必要がないと言う。蕭紅を男の子と同等に扱い、男の子より才能があると認めていた伯父でさえも、「女」の認識において、その見識に限界のあることを露呈したのである。男の子に負けたことのなかった蕭紅が初めて身をもって体験した「女」であるがゆえの不条理だったのではないだろうか。

2. 『生死の場』の出版に至るまで

1933年、蕭紅は、蕭軍らハルピン左翼文芸界の仲間の激励を受けて、短編小説『王阿嫂の死』を書き上げる。そして、10月、蕭軍と共同で短編小説集『跋涉』¹²⁾を出版した。

『跋涉』出版時の様子を鉄峰は次のように記す。

『跋涉』は、東北が陥落したのち、東北の文壇に出現した最初の作品集で、出版されるとすぐ東北陥落地域の文壇に強烈な反響を引き起こし、広範な読者の歓迎と好評を得た。それによって蕭紅は文学創作への堅固な基礎を定め、東北最初の新文学女流作家の肩書きを得たのである。

(中略)

『跋涉』に収められた大部分の作品は、日本傀儡政権下の社会の暗黒、侵略者の手先による人民抑圧の罪悪、地主の農民に対する残酷な搾取と迫害を暴露し、広範な労働者の覚醒と反抗と闘争を大胆に称賛したので、印刷を終えて書店で発売されるや否や、日本傀儡政権の警察に没収された。自分の本が発売された喜びも束の間、恐怖に変わったのである。³⁾

ハルピン左翼文芸界の友人が逮捕されたり逃亡したりしていく中、蕭紅と蕭軍は、日本傀儡政権の憲兵や警察の捜査の手が及ぶのではないかと、恐怖に襲われ、気が動転する。散文集『商市街』のなかの「劇団」の一文から、その狼狽ぶりが窺える。

……郎華（蕭軍）がベッドの下からトランクを引っ張り出した。床にロウソクを立て、わたしたちは床中に紙切れをぶちまけて、丹念に点検し始めた。犯罪的なものは何もない。しかし、自信がなかった。本の中に「満州国」を罵ることばなどが挟まっていないか心配で、一冊一冊ページをめくった。すべて片付けて、トランクのなかはすっかりかんになった。ゴリーキーの写真も燃やした。炉の火は顔が痛くなるほど燃えた。日本の憲兵が今にも私たちを捕まえにやってくるような気がして、わたしは急いで燃やした。

(中略)

わたしが赤鉛筆で吸墨紙にかいてある字を子細に見てみると、それはまさにあの法を犯している文字なのだ。

——チビ日本人、イス、こんちくしょうの「満州国」……——

わたしは二目と見ずに、炉に放り込んだ。

「吸墨紙だよ、吸墨紙！」郎華は惜しがって地団駄を踏んだ。彼が気付いたときには、すでに燃え始めていた。「あんなに大きな吸墨紙を燃やすなんて、きみは目がくらんだのか？ 何もかも燃やしてからに。使い道を考えるよ」

彼があまりにも惜しがるので、わたしは腹が立った。吸墨紙が大事といって、命がけで守らなきゃいけないほど大事なの？

「一匹の虱のために綿入れを焼いてしまう」郎華はわたしを罵った。「きみは文字を切

り取ることもできないのか？」

わたしにそんな方法を思いつく余裕などあるはずがない！ 本当にバカなことをした、キズひとつのためにリンゴをまるごと捨ててしまうなんて！¹⁴⁾

1934年6月、蕭紅は蕭軍と共に、日本傀儡政権下のハルピンを逃れ、青島に至る。

そして、小説『生死の場』を完成させる。

『生死の場』は全17章から成り、前半10章はハルピンで執筆された。第1章「麦打ち場」と第2章「野菜畑」は「悄吟」のペンネームで、1934年4月20日から5月17日まで、ハルピンの『国際協報』副刊「国際公園」に連載された。

青島での4ヶ月あまり、蕭紅は彼女の苦難に満ちた生涯の中では比較的安定した日々を過ごす。蕭軍が新聞社に勤め、生活費の心配もない。互いに刺激し合いながら、彼女は『生死の場』の執筆に、蕭軍は小説『八月の郷村』の執筆に励んだ。

蕭軍は自分たちの作品をなんとか出版したいと考え、上海の魯迅に手紙を書いて、自分たちの原稿を読んでくれるよう頼んでみた。すると、魯迅からすぐに快諾の返信が来たのである。それは不穏な社会情勢のなか、将来の展望が見えない二人に、大きな希望と喜びをもたらした。

その年10月23日（仲秋節）に国民党による大捜査があり、青島の共産党組織が壊滅的な打撃を受けて、蕭軍が編集に携わっていた『青島晨報』のメンバーが四散してしまう。それで、10月末、蕭軍も蕭紅と共に日本の汽船に乗って、魯迅のいる上海に向かった。

上海で、蕭紅は魯迅の庇護と援助のもと、多くの作品を発表する。

なかでも「抗日作家」蕭紅の代表作である中編小説『生死の場』の出版は、大いに魯迅の手を煩わせることになる。もし魯迅の力添えがなかったら、出版はかなり難しかったであろう。

魯迅は初め、『生死の場』を公に出版しようと考え、原稿を『文学社』に持ち込んだ。ところが原稿が国民党中央宣伝部書報検査委員会に回されて、半年間放ったらかしにされた挙げ句、さらに別のところに回されて、なかなか許可が得られなかった。それで、魯迅は自らが編集に携わっている『奴隸叢書』に組み込んで自費出版することにした。¹⁵⁾また、蕭紅の願いを聞き入れて、自ら序文を書く。彼女が『生死の場』を脱稿してから出版に漕ぎ着けるまで、一年二ヶ月余の時間が経過していたのである。

このように「難産」であったにも関わらず、出版されたとき、一躍文壇の注目を集めた。時あたかも日本帝国主義が中国国内に大挙進撃しようと、虎視眈々と機を窺っている、まさに「中華民族存亡の機」ともいうべき時期に、日本傀儡政権下の東北の農民の惨状を描いた作品が出版されたのである。抗日を闘う人々によって熱烈に歓迎されたのは当然の成り行きといえる。

許広平は後年、蕭紅を追憶する一文のなかで、『生死の場』に触れて次のように記している。

東北人民として征服者に抗議する記念碑的作品は、かの有名な『八月の郷村』と『生死の場』である。この二つの作品の出現は、まぎれもなく上海文壇にかなりの斬新さと衝撃をもたらした。雄大かつ確固とした血の滴るような縮図だったからである。¹⁶⁾

蕭紅は23歳で『生死の場』を書き上げたのだが、彼女はこのときすでに、人生における多くの苦痛を経験していた。8歳で母親と死別し、18歳で彼女を最も慈しんだ祖父と死別。21歳で未婚のまま妊娠、出産。そして経済的困窮のために嬰兒を人手に渡すという辛い選択をしている。これらの経験、とりわけ妊娠、出産という女性にとっての一大事を経験したことによって、蕭紅は、否応なしに女性であることを意識し、女性であることの不条理を強く認識したにちがいない。そうして、小説『生死の場』が誕生するのである。

『生死の場』の出版に際して、「蕭紅」のペンネームを使い始める。

3. 小説『生死の場』

『生死の場』は、中国東北の長閑な農村の情景描写で始まる。夏、のんびりと樹木の幹や根を嚙って咀嚼している山羊。どこまでも広がっている広大な農地。そこでは大地の恵みを受けて作物が豊かに育ち、その農地の中を一筋の緑鮮やかなニレの並木道が貫いている。これはまさに東北の典型的な農村風景で、ハルビン郊外にちょっと足を伸ばせば、そこそこに見られる光景である。そんな豊かな自然の長閑な農村が、実は凄惨な「生」と「死」の舞台なのである。

胡風が「読後記」で記しているように、農民たちは「アリのように生き、わけもわからず生殖し、混乱のうちに死ぬ。自分の血と汗で大地を肥沃にし、作物を育て、家畜を飼う。自然の暴君と二本足の暴君の威力の下で一生懸命うごめいている」¹⁷⁾のである。

この作品の舞台となるのは、「九・一八」すなわち満州事変（1931年9月18日）前後の東北の農村である。前半9章では満州事変以前、後半8章では満州事変以後が描かれる。

前半では封建地主階級の苛酷な搾取を主題として、自然災害、病苦、死、出産等、農民をとりまく悲惨な状況が語られる。

第1章では、農民たちが日常の些細な出来事に右往左往する様が、生き生きと描き出される。

農民たちは毎日毎日働き詰めに働く。実りの秋に、地主に小作料がきちんと払えるようにと働く。しかし、こんなささやかな望みさえも、叶えられないのだ。

働いても働いても、地主に払う金が足りない。第3章「老馬、屠殺場に行く」では地主に払う金を工面するため、主人公の一人と目される王婆は飼っていた老馬を売りに行く。長い年月自分の片腕のように働いてきた老馬を屠殺場に連れて行かなければならない王婆、その胸の内

を知ってか知らずか従順に従う老馬。飼い主に全幅の信頼を寄せる家畜の無邪気な様とその信頼を裏切らねばならない王婆の切ない心情。……蕭紅の冴えた筆致がそのギャップの大きさを際立たせ、深い哀切の情を引き起こす。

しかも、こんなにつらい、身を引き裂かれるような思いをしてやっと手に入れた金さえも、地主の使いが待ち構えていて、びた一文残さず持ち去ってしまう。

そして、冬。第4章「荒山」では、女たちが王婆の家のオンドルに集い、靴を編んだり繕いものをしたりして、束の間の穏やかな時を過ごす。だが、それに続いて、美人の若妻月英の悲惨な闘病と死。そして、男たちは小作料値上げに抵抗しようと密談するが、思いがけない結末を迎える。ものごとすべて、地主にとってはいい方向に、農民にとっては悪い方向に展開し、農民の生活はさらに逼迫していく。

春。生命が芽吹く季節。第6章「刑罰の日々」は犬の出産場面から始まる。そして、人間の出産。それは女にとっては命がけの大事業であるが、男たちにはその痛み、苦しさがわかるはずもないし、わかろうともしない。それどころか、女が出産という大事に臨んでいるときでさえ、男は女に対して横暴だ。

凄惨な出産場面が続くなかで、作者は麻面婆〔あばたお婆さん〕にこう言わせる。

「あたいはもう子供は要らないって言ったのに！ まったく、良心っていうものがないんだから！ これはみんなあんたのせいじゃないか？ あたいはあんたに殺されちゃう！」¹⁸⁾

麻面婆は、無知で単純な二里半という農夫の妻で、「思考する」こととは全く無縁で、反抗することを知らない。「恨みごとの言えない」「永遠にへたりきった白い綿のような」彼女だが、出産のときは、男を恨んで大声で騒ぎ立て、泣き喚く。

蕭紅自身、妊娠、出産を通して「女」であることの肉体的不条理を思い知っていた。出産とは女が血まみれになって受けねばならぬ「刑罰」であると、彼女は感じていたのかもしれない。それは人間の尊厳などとはほど遠い、家畜と同レベルの営みなのだ、と彼女は言いたかったのであろう。豚の出産でこの章が終わる。

『生死の場』の登場人物たちは苛酷な運命に翻弄されるかのように、つぎからつぎへと執拗に不幸に見舞われる。

アメリカの蕭紅研究家葛浩文〔Howard Goldblatt〕は『生死の場』に登場する農民について、次のように述べる。

これらの農民にとって、生命はこれまでずっとつらいあがきの過程であった。彼らの生

命に対する態度も、まさしく彼らの貧困生活を映したものである。この悲劇的スタイルの小説には、現実生活のなかで、多くの読者が期待するほっとできる雰囲気は、影も形もない。(中略)『生死の場』の美しいところは、作品全体にちりばめられている農村の情景と村人たちの事物や人生に対する醇朴な態度である。しかし、この美しいと思われるところに、あの様々の残酷と無知によって引き起こされる醜さが覆い被さっているのである。¹⁹⁾

第10章で、場面は10年後に飛ぶ。満州事変後、日本帝国主義の農村への侵略が始まり、農民の生活そのものが無惨に破壊されていく。そして、極限状況に追い込まれた農民が、生きるために団結して闘おうと立ち上がる。

この作品が出版されたのは、先に述べたように、中国国内では抗日の気運が高まるなかであったので、当時は後半部分が注目されて、抗日文学として高く評価され、蕭紅も東北出身の「抗日作家」として脚光を浴びる。

しかし、尾坂徳司は「予想ほどには抗日が書かれておらず、日本軍の凶悪残忍さも書かれておらず、……」²⁰⁾と読後感を記しているし、葛浩文も「書中で日本人の暴行の実例をあげているが、その筆致は想像力に欠けている。あまり感情も移入されておらず、読者の共鳴を呼びにくい。妊婦の腹を割くとか、若い女が連れて行かれて強姦されるという伝聞を村民が話す、悪事を働く日本人は書中にはほとんど現れず、緊張感に欠ける」と記している。

そして、葛浩文は「作者がもともと意図したのは、彼女自身の日常の観察と生活体験のなかでの素材、つまり故郷の農民の生活および彼らの生死をめぐる抗う状況を生き生きと描き出すことだった」と論じ、途中でテーマを変更したと指摘する。

概していうと、蕭紅は『生死の場』の作品の途中でテーマを変更した。農民が決起する動因もきちんと説明できていないし、後半三分の一の筆は散漫である。それらは蕭紅があまりよく知らない題材を描こうと試みたことを示している²¹⁾。

尾坂徳司は『生死の場』を執筆するときの蕭紅の心境を「東北人民の抗日は書かねばならない。だが、抗日だけを書くなら、自分は到底蕭軍に及ばない。歴史の認識において、共産党や東北人民の行動、具体的には抗日義勇軍の行動について、蕭紅は自分の知識が貧弱であることを承知していた」と推断し、完成までの経緯を次のように説明する。

『生死の場』の第1章は、彼女がハルピン『国際協報』に発表した『麦打ち場』をあてることにした。あとは書き足して行けばよい。東北の長閑な農村風景、つづいて苛酷な生

と死の抗争、結末は生きる道を知った安定した情緒。小説の起伏は、蕭紅自身の幼時から現在までの人生と重なりあっているようだった。彼女の『生死の場』はこうして、断続的に書き継がれ、34年9月9日に脱稿した。²²⁾

村人が闘わなければならない対象は、地主による搾取だけではなく、天災、伝染病、不慮の事故等々である。そして、とどめは日本帝国主義の侵略、と続く。素朴で無知な彼らは、耐えきれないほどの不幸を経験して、少しずつ変わっていく。そして、ついには民族の誇りに日覚め、団結して立ち上がる。王婆はもちろん、「鎌刀会」失敗の後すっかり骨抜きにされてしまったお人好しの趙三も立ち上がる。自分の山羊のことが眼中になかった二里半でさえ、最後には決死隊に馳せ参じる。

無知で単純な二里半は、どんなに虐げられても負け犬のように抗うことをしない。山羊を捜して隣人と争いになり、敵わないと見てとると、捜すことを諦めて逃げ帰る。そして、山羊を捜すところくな事にならないと考え、妻にも「捜すんじゃないよ」と言う（第1章）。また、日本の侵略に対して立ち上がろうと村人が謀議する場では、鼾をかいて居眠りをする。彼は国が亡びることの意味すらわかっていなかった。抗日の決起集会当日、荒廃した村には生け贄にする雄鶏が一羽もない。それで、二里半の山羊が生け贄として担ぎ出された。村人が一人ずつ宣誓を行い、悲壮な雰囲気醸し出される中、いよいよ山羊が殺されるそのときが迫る。そこへ、二里半が雄鶏を提げて現れるのである。そして、決起集会には目もくれず、皆の非難の眼差しを背に、山羊を連れて帰って行く（第13章）。この場面は、山羊を救うために必死の思いで雄鶏を探し回ったであろう二里半を彷彿させる。

作者は、二里半の無知で単純なさまを揶揄するかのように辛辣な筆致で描き出しているが、彼が無知で単純であることによって、山羊に対する素朴で一途な情が浮き彫りになり、読者の共感を呼ぶ。その共感があるからこそ、彼が山羊を趙三に託して決死隊に参加する最後の場面は、いっそうの迫力で読者の胸に迫る。

二里半が振り返ったとき、囲いの中に閉じ込めておいたはずの老いた山羊が、あろうことか、うしろからついて来ていた。とたんに彼の顔はさらに長く引き伸ばされた。

「この老いぼれ山羊、……わしに代わって世話してくれよ！ 趙三兄い！ あんたが生きているかぎり、世話してくれ……」

二里半の手は山羊の毛の上で別れを惜しみ、涙に濡れた手は最後のひととき、山羊の毛を撫でていた。

彼は足早に歩いた、前を行く李青山を追って。背後では山羊がしきりに哀しげに鳴き、山羊のひげはゆっくりと揺れていた。……

二里半の不健全な足（びっこ）が上下に揺れながら、遠ざかっていった！ かすんでいった！ 山と林がしだいに遠のいていった。山羊がはるかかなたで老いぼれ趙三に付き従いながら、かすかに嘶いた。²³⁾

それまで、どんなに肝心かなめのときであっても、自分の小さな世界に閉じこもっていた二里半が、自分の妻子まで殺され、ついに生きるために闘うのだ。抗日に立ち上がるこの最後の場面は、山羊を残して行く二里半の切ない心情が行間に溢れ、読者の胸を打つ。と同時に、読者は、生きるために闘う存在となった二里半に希望を見出すのである。

作品の冒頭で、農村風景の一部として登場して物語の発端となった山羊が、最後の場面で、しみじみとした余韻を残して物語を終える。

4. 『生死の場』の女性像

尾坂徳司は『生死の場』を一気に読み終えて、「題名にいう『生死の場』とは女にとっての戦いの場の意味ではないのかと思ってみたりした」²⁴⁾ともらす。

たしかに、『生死の場』で精彩を放っているのは、女が生きるために「戦う」場面である。支配者（封建地主階級や、売国行為をした国民党および日本帝国主義）に支配され抑圧される被支配者（農民）、その被支配者のなかでも更に男の支配をも受ける女、蕭紅は男が女を支配するだけでなく、女を含めた社会全体が女を抑圧する現実をじっと見つめる。そして、抑圧された女たちの「抗い」を、女性の視点で捉えて赤裸々に描く。

蕭紅は、生来、正義感が強く、理不尽なことには我慢ならなかった。そんな彼女が当時の社会にあって、女であるがゆえに理不尽にも男から肉体的、精神的屈辱を受けて、自尊心をひどく傷つけられ、何度も悔しい思いをしたであろうことは想像に難くない。女を抑圧する男、男の非人間的行為を許す社会、女は二重三重の不条理を蒙らねばならない。

ここで『生死の場』の主人公ともいうべき二人の女性、王婆と金枝について考察してみたい。

王婆は、すでに幾多の困難を経てきて、封建的偏見に囚われない、独立心の強い勇敢な女として登場する。その風貌の形象——「星の光の下で顔の皺が緑がかり、眼は青みを帯び、その眼は大きくて丸い」「頭髮が朝の陽光に照らされてトウモロコシの穂のように赤く縮れてしなびている」「灰色の幽霊」「灰色の大きな鳥のように」——それに村の女たちの中におけるリーダー的立場から、老婆のイメージを抱くが、まだ50歳に達していない。その風貌からか、子供たちに「フクロウ」とあだ名され、本人はそんな怪物なんかであるはずがない、と不機嫌だ。

そして、彼女が経験したつらい出来事が独白の形で断片的に語られる。

彼女は藁を積み上げた藁山に三歳の子供を坐らせて、牛の世話をしに行った。子供のことを思い出して戻って見ると、子供は藁山の上には見当たらず、藁山のそばに鉄の犁と一緒に転がっていて、あたりは血だらけであった。しかし、彼女にとって、子供の死も子犬の死と同レベルの問題で、頭の中は麦のことでいっぱいだった。冬になって隣人と麦粒を比べ、自分のが大きい、と得意に思う。

貧困に追い詰められ疲弊した農民の、子供より麦が大事と思う、その精神の麻痺を、作者はじっと見据え、淡々と表現する。そして、その麻痺からの覚醒を描く。

冬になって王婆の背はひどく曲がり、手には大きな麦粒を持っていた。しかし、隣人の子供は大きくなった！……そのときになってやっと、王婆は、忽然と子供のことを思い出す。

「……そのあと、来る夜も来る夜もつらくて眠れなかった。麦粒がどうだっていうのさ？ そのときから、わたしは麦粒さえどうでもよくなった！ 今だって、わたしは何も大したこととは思わない。当時、わたしはまだ20歳だった」²⁵⁾

王婆は夫の趙三の後妻であり、彼女自身も再婚という設定で、前夫との間に一男一女がいる。そして、今は趙三と趙三の前妻の息子平児の三人で暮らしている。面白いことに、作品に登場する女性のほとんどが男に支配される被抑圧者であるのに、王婆は趙三と対等、ないしは彼よりも冷静沈着な人間として描かれている。

村の女たちの先頭に立ち、病気の若妻月英の世話をしたり、次々と始まるお産を手伝ったりと忙しい。そして、小作料値上げの噂を聞いて男たちがそれを阻止しようと密談しているのに気付くと、他の女たちは自分たちの生活が壊されるのではないかと不穏な動きを心配するが、王婆はびくともせず積極的に支持し、趙三に銃の使い方を教え、趙三に一日置かれる。

それほどしっかり者の王婆も、匪賊となった息子が官憲に銃殺されたことを知ると、服毒自殺を図る。葬式だ、墓だ、と夫の趙三が駆けずり回るが、幸いにも墓に埋められる寸前に息を吹き返す。こうして、彼女は、次々と、大切なもの（三歳の子供、老馬、牛、息子）を失い、ついには、心の拠り所となっていた娘までもが、抗日運動に身を投じて、殺されてしまう。

強情で独立心の強い王婆は、自分の力で生きる糧を稼ぎ、夫権の支配から自らを解放したのであるが、それは血と汗と涙の代償なくしてなし得ることはなかった。旧社会の農村では、過酷な搾取で生活は逼迫する。そうしたなかで、男以上の忍耐力で重労働をこなし、夫権の支配から自らを解放していた女は珍しくない。それは必然的結果ともいえる。王婆は、封建体制下の農村で死と隣り合わせに生きていた女の必然的形象といえるであろう。

次にこの作品の第一主人公ともいべき金枝について考察してみたい。

17歳の娘は「あたかも鉄片が磁石に引き寄せられてくっついていくかのように」成業という青年の待つ河原に引き寄せられていく（第2章）。

だが、ここから金枝の不幸が始まる。

成業が金枝と結婚したいと、叔母に打ち明けたとき、叔母が言う。

「おまえが娶ったら、あの娘は変わってしまうだろうよ。今と違って、あの娘の顔は青白くなって、おまえもあの娘を気に掛けなくなって、殴って罵るだろう！ 男が女を気に掛けるのは、おまえのような年頃だけなのさ！」²⁶⁾

生を謳歌する若い恋人たちの営みは、当然の結果として、女に報いをもたらす。金枝は結婚する前に身籠もって苦悩する。

金枝はあまりにも辛かった。お腹が恐ろしい怪物に化けたように感じ、中に硬い塊があるように感じた。手でちょっときつく押さえてみると、硬いところのはっきり感じられた。お腹に子供ができたと確信したとき、彼女の心は吐き気を覚えたように震えだし、彼女は恐怖に襲われた。²⁷⁾

ここで、話を蕭紅自身に戻す。蕭紅は父の決めた婚姻を嫌って逃げたのだが、伯父たちの監視下にあった阿城県からハルピンに逃れたあと、一時その婚姻相手の王恩甲と同棲する。そして、妊娠。王恩甲はその事実を知りながら、蕭紅を旅館に置き去りにして姿をくらましてしまう。蕭紅は置き去りにされた旅館で、宿代が払えずに人質となり、軟禁される。そこで彼女は自分の意志に関係なく日に日に大きくなるお腹を抱えて、悶々として過ごす。自分の肉体の一部でありながら、自分ではどうすることもできないのである。ただ生まれてくるのを待つしかない。その間の苛立ち、不安、恐怖、そして絶望感、その苦い経験が上で引用した描写に投影されていることであろう。

さて、金枝は母親の思いに背く形でどうやら結婚はしたものの、人間が人間らしい心を失ってしまうほどの貧困が、金枝を不幸へと追い詰めていく。夫との関係はぎくしゃくし始め、ついには夫婦げんかの挙げ句、夫によって赤ん坊を投げ殺されてしまう（第7章）。

夫の死後、ハルピンへ働きに出るのだが、一人都会へ出て生活する女を待ち受けていたのは、村での生活より更に苛酷な現実であった。繕いの仕事をして得た僅かな金は宿代に消え、その日暮らしがやっとの有様なのだ。そして、金をちらつかせる男の畏にはまって陵辱され、耐え難い屈辱を味わう。しかも、金を手に入れたことで、同宿の女たちの妬みを買うことになる。

秋山洋子は、金枝について、『生死の場』を女の視点から読むとき最も重要な役割をはたす

登場人物であり、「強姦される女」であると論断する。そして、金枝の「わたしは中国人を恨む！わたしがなにも恨まないというのでない限り」ということばの意味を次のように解く。

一人の金枝という女に、蕭紅は二度違った形の強姦を体験させる。恋愛の形をした強姦、夫婦間の強姦、金を媒介にした強姦。肉体に対する残虐行為の中でも、被害者が女でなければ成立しないのが強姦である。その象徴的な被害者である金枝が、日本人の残虐行為を訴える王婆の演説を聞いたあとで、ぼつりともらすのがさきに引用した「おらは中国人が恨めしい」というつぶやきである。²⁸⁾

作者は金枝を通して、弱者である女性を虐待する男と、女性を蔑視する社会通念を告発する。そこには、王婆や麻面婆を凝視するかのように丁寧描写しているのに比べると、かなり直截的に被害を訴えている情調が感じられる。蕭紅は自らの体験、それによって味わった悔しき、恨みの感情を移入したのであろう。

片山智行は、『生死の場』のテーマを、蕭紅が感じとってきたすべての自然的、社会的不条理にたいする抗議と位置づけて、次のように論述する。

そのじつ、蕭紅にとっては、日本の侵略さえも彼女がみずからの人生において直面してきた数多くの不条理のひとつにすぎない。彼女にとっては、身をもって味わい知りえたこの世の不条理のすべてが、それぞれに深刻な意味を持っているのである。彼女においては、それらを政治問題に置き換えて処理することは不可能であった。とりわけ、女性であるがゆえに受けねばならぬ「刑罰」や、繕い婦をしてさえ食っていけぬ貧窮は、金枝（作者）にとってはどうしても忘れられぬ恨みなのである。当時あっては、たんに政治的条件（「抗日」）を整えるだけでは解決すべくもない、暗くて重い深刻な不条理であった。こうした不条理がつねに眼前にあり、蕭紅の胸を重苦しく締めつけていたのである。²⁹⁾

前半、逢い引きの場面（第2章）から夫によって赤ん坊が惨殺される（第7章）までは、農村の風景、金枝の所作、金枝の心の動きが、寄せては返す波のように律動的で抑揚の利いた文体で生き生きと描かれ、彼女の心のときめきが、彼女の苦しみが切々と伝わってくる。

ところが、第14章、金枝がひとり都会（ハルピン）に出て働く場面では、彼女がいかに惨めで苛酷な状況に置かれているか、理性ではよくわかるのだが、王婆や二里半の哀しみが読者の胸を打ち、共感を呼び起こすのに比して、こちらは読者の感情に訴える力がやや弱い。

ハルピンの金枝を描くとき、作者は冷静さを失っていたのではないか。何故なら、葛浩文が指摘するように「この章は疑いもなく多くの自伝的要素が混在している」³⁰⁾からである。みず

からが体験した女であるがゆえの不条理、男から、社会から受けた理不尽な仕打ち、そうした作者にとって最も重大な不条理が、ここではあまりにもストレートに描き出されている。

しかしながら、全体的に言うと、『生死の場』は、半封建半植民地の東北の農村において、地主や自然や征服者の支配を受ける農民、なかでもさらに男の支配をも受ける女に次々と襲いかかる不条理が、深刻に提示されており、それらに対する作者の切実な思いが、登場人物を通してさまざまな形で表現されている。この小説は1930年代を代表する文学作品の一つと言っても、決して過言ではないであろう。

おわりに

魯迅は『生死の場』を読んで、「これはもとよりまだ略図に過ぎず、叙事と情景描写のほうが人物描写に優る。けれども、北方人民の生に対する強靱さ、死に対する抗いを描くその力は、しばしば紙背に徹す」³¹⁾と評している。

確かに『生死の場』は、一場面一場面、大胆な線で描かれたデッサンの趣がある。その筆致は、時に緻密でしっとりとした情感を湛え、時に荒々しく力が漲り躍動感溢れる。

こうした蕭紅独特の斬新な筆致は、彼女の鋭い観察力と豊かな感受性、そして天性の言語感覚——それは幼いころ祖父から詩を学んで無意識のうちに磨かれていた——から生まれた。

貧困にあえぐ被抑圧者の不条理を描いたこの作品は、物語を語り聞かせるかのような、律動的で抑揚の利いたその筆致によって独特の雰囲気が醸成されており、それが読者を知らず識らずのうちに、なんとも切なくやるせない不条理の世界に引きずり込んでいくのである。

注

- 1) 蕭紅の出自と経歴については、鉄峰「蕭紅生平事跡考」(『蕭紅全集』ハルビン出版社、1998年)及び、平石淑子編『蕭紅作品及び関係資料目録』(吸古書院、2003年)を参考にした。
- 2) 蕭紅の父張廷学(1888-1960)は張維禎の弟張維獄の三男。12歳のとき、張維禎の養子となる。黒竜江省優級師範学堂を卒業。農業学堂教員、小学校長、胡蘭県教育局長、巴彥県教育局督学、黒竜江省教育庁秘書などを歴任する。
- 3) 『胡蘭河伝』上海雜誌図書公司、1941年(『蕭紅全集』169頁)。
- 4) 「永久の憧れと追求」『報告』第1巻、1937年(『蕭紅全集』1180頁)。
- 5) 『胡蘭河伝』(前掲書、162頁)。
- 6) 鉄峰『蕭紅伝』ハルビン、北方文芸出版社、1993年、9頁。
- 7) 『胡蘭河伝』(前掲書、176頁)。

蕭紅と『生死の場』

- 8) 「鍍金の学説」ハルビン、『国際協報』週刊『文芸』、1934年6月（『蕭紅全集』1167頁）。
- 9) 蕭紅13歳のとき、軍閥の息子王恩甲との結婚が父親によって取り決められた。
- 10) 「鍍金の学説」（前掲書、1168頁）。
- 11) 「永久の憧れと追求」（前掲書、1179頁）。
- 12) 『跋涉』ハルビン、五日画報印刷社、1933年10月。三郎（蕭軍）と悄吟（蕭紅）共著の短編集。蕭紅の作品は「春曲」「王阿嫂の死」「広告助手」「黒い小犬」「凧を見る」「夜風」。
- 13) 鉄峰前掲書、147頁。
- 14) 「劇団」『南市街』上海、文化生活出版社、1936年8月（『蕭紅全集』641頁）。
- 15) 魯迅「生死場／序言」『生死場』上海、容光書局、1935年12月（『蕭紅全集』2頁）。
- 16) 許広平「追憶蕭紅」『文芸復興』第1巻第6期、1946年7月（王観泉編『懐念蕭紅』黒竜江人民出版社、1984年、17頁）。
- 17) 胡風「生死場／読後記」『生死場』（前掲書、94頁）。
- 18) 『生死場』（前掲書、48頁）。
- 19) 葛浩文『蕭紅評伝』ハルビン、北方文芸出版社、1985年、51頁。
- 20) 尾坂徳司『蕭紅伝』東京、燎原書店、1983年、6頁。
- 21) 葛浩文前掲書、54頁。
- 22) 尾坂前掲書、170頁。
- 23) 『生死場』（前掲書、92頁）。
- 24) 尾坂前掲書、6頁。
- 25) 『生死場』（前掲書、11頁）。
- 26) 『生死場』（前掲書、17頁）。
- 27) 『生死場』（前掲書、22頁）。
- 28) 秋山洋子『私と中国とフェミニズム』東京、インパクト出版会、2004年、150頁。
- 29) 片山智行「蕭紅の文学観と「抗日」問題——『生死の場』を中心に——」『人文研究』第40巻第6分冊、1988年、391頁。
- 30) 葛浩文前掲書、55頁。
- 31) 魯迅前掲（前掲書、2頁）。

（やまもと・かずこ 短期大学部講師）